

フザリウムによるグロリオサ乾腐病（新病害）

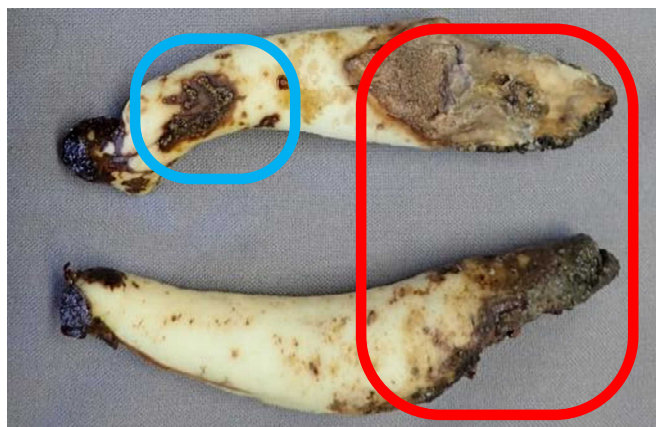


写真1 腐敗（赤丸）とかさぶた（青丸）



写真2 培地上の菌糸(左)と分生子(右)



写真3 立枯症状を示す茎(中央と右)

高知県内のグロリオサ産地では、近年、球根の腐敗や、それに伴う定植後の不発芽が問題となっています(写真1)。原因究明のため、障害部から菌の分離と、分離菌の形態観察などを行ったところ、*Fusarium oxysporum* species complexに属する糸状菌(カビ)によって引き起こされる病害であることが明らかとなり、病名としてグロリオサ乾腐病を提案しました(写真2)。

グロリオサ乾腐病菌に感染すると、球根の生長点が腐敗したり、球根の表面にかさぶたの症状が現れます(写真1)。収穫時以外も、貯蔵や芽出し中に白色の菌糸が発生し、腐敗する場合があります。軽微な腐敗やかさぶたは気づきにくいことから、障害のあ

る球根を定植することで、株は不発芽となります。病原菌を混ぜた土で、健全な球根を栽培すると、花の収穫後に立枯症状を示すこともわかりました(写真3)。

これらのことから、本病害の伝染源は、菌に感染した球根や、土壌中に残存した病原菌であると考えられます。バスアミド微粒剤やクロルピクリン錠剤等の薬剤は、花き類のフザリウムによる病害に適用があるため、本病害に対する効果が期待できます。今後も継続して調査を行うことで本病の被害を明らかにするとともに、防除体系の確立に取り組んでいきます。

(病理担当 林一沙 088-863-4915)